

人間的行為における能動と受動

－トマス・アクィナスにおける人間的行為の可能性－

佐々木 亘

The Activity and Passivity in Human Actions

－On the Possibility of Human Actions in Thomas Aquinas－

Wataru Sasaki

トマスによると、人間は自らのはたらきの主であるが、この「主」という言葉は、「僕」との相対的な関係にもとづいて用いられている。すなわち、「主である」ということは、その権力の対象となる誰かが「僕」として存在していることを前提にしている。そして、主と僕の関係とは、まさに「能動と受動の関係」にほかならない。人間的行為は、この関係にそくして成立しており、この点に人間的行為そのものの可能性が認められるのである。

Key Words: [人間的行為] [能動性] [受動性] [目的] [究極目的]

(Received November 16, 2011)

序

本稿は、「共同体と連帯性－トマス・アクィナスにおけるペルソナと共同善－」という博士論文における、第一部「“dominus”としてのペルソナ」の第二章「人間的行為における能動と受動」に対応する予定の部分である。この博士論文は、ペルソナに関する詳細な分析を通じて、とくに「連帯性」という観点から、トマスの共同体論の現代的、そして普遍的解釈をめざしている⁽¹⁾。

さて、人間は、理性的本性によって自らのはたらきの主権を有することから、ペルソナと位置づけられる。そして、自由意思と自らの行動の権力を持つ者として、神を範型とする“imago”である。さらに、人間は自らのはたらきの“dominus”であり、人間が“dominus”である行為が「人間的行為」である。

人間は理性と意志によって自らのはたらきの“dominus”であるが、意志の対象が目的であり善であるから、人間的行為はすべて目的のために成立している。すなわち、何かを目的として行為するのである。しかるに、意志のはたらきは、至福である究極目的への必然的欲求にもとづいている。このかぎりにおいて、人間は究極目的への運動における“dominus”である。

*鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

では、人間の行為において、目的と究極目的とはどのような関係にあるのであろうか。トマスは、『神学大全』第一部第八二問題第一項第三異論解答で次のように言っている。

われわれは、これかあれかを選択することができるということにそくして、われわれのはたらきの“dominus”である。しかるに、『倫理学』第三巻で言われているように、「選択(electio)」は、「目的」ではなく「目的へのてだて」にかかわる。それゆえ、究極目的への欲求は、われわれがその“dominus”であることがらには属していない⁽¹⁾。

人間は理性と意志によって自らのはたらきの“dominus”であるが、その場合、かかる主権の対象は、行為そのものではなく、行為の選択であって、選択は目的ではなく「目的へのてだて」にかかっている。したがって、究極目的への欲求は、人間の行為の根源であるとしても、主権の対象ではない。

人間の行為は目的のために成立するにもかかわらず、人間が自らのはたらきの“dominus”であるという場合のはたらきは、厳密には「目的へのてだてに関する選択」にすぎない。しかしながら、このことは、ペルソナとしての、“imago”としての人間の存在を低めるものではない。むしろ、究極目的への必然的な欲求に対して人間がその“dominus”ではないということは、いわば、「神への運動」に関して人間は必然的な仕方にかかわっており、選択を通じて自らの主権がおよぶ範囲で自体的な仕方ではたらくことは可能であるとしても、“imago”であるかぎり、この運動そのものから脱却することはできないということを意味しているように思われる。人間は、たとえどのような状況にあったとしても、理性的本性を失わないかぎり、ペルソナであり、神の“imago”であり、自らのはたらきの“dominus”であり続ける。

もちろん、「究極目的への欲求は、われわれがその“dominus”であることがらには属していない」ということから、至福である究極目的への到達が無条件に帰結されるわけではない。われわれが必然的な仕方まで至福を欲求していることは真実である。しかし、まさに選択を通じて、本来の至福からかけ離れたものへと向かう可能性は、われわれにとってきわめて現実的である。何を目的へのてだてにするかが、究極目的への運動そのものを、善くも悪くも方向づけるわけである。

I. “dominus” と “servus”

まず、「人間が自らのはたらきの“dominus”である」ということは、そもそもどのようなことを意味しているのであろうか。トマスにおける“dominus”の用法は、二つの点で特徴づけられる。すなわち、その用例の多くが神、そしてキリストを示す言葉として用いられている。そして、「主人」としての用例では、多くの場合、「僕(servus)」との関係から“dominus”と位置づけられている⁽³⁾。

かかる二つの点は、トマスの“dominus”解釈にとって、きわめて重要である。第一に、“dominus”が神、そしてキリストを示すかぎりにおいて、「人間が自らのはたらきの“dominus”である」ということは何らかの超越性を表示することになる。第二に、“dominus”が“servus”

との関係において用いられるかぎり、「人間が自らのはたらきの“dominus”である」ということは、たんなる能動性にとどまらない可能性を示しうる。前者に関しては、別の稿で論じるとして、本稿では、後者について考察していきたい。

では、“dominus”と“servus”との間には、どのような関係があるのであろうか。トマスは、『神学大全』第三部第二〇問題第一項の異論解答で、次のように言っている。

「隷属 (servitus)」と「主権」の関係は、「能動 (actio)」と「受動 (passio)」にもとづいて確立される。それはすなわち、“dominus”によってその命令にそくして動かされるということが“servus”に属するかぎりにおいてである。しかるに、行為することは、能動者として本性に帰属させられるのではなく、ペルソナに帰属させられる⁽⁴⁾。

“dominus”と“servus”の関係とは、主権と隷属の関係であり、能動と受動にもとづく関係である。“dominus”は、“servus”を自らの命令によって動かすという「能動性」にそくして、“servus”に対する主権を有している。これに対して、“servus”は“dominus”の命令によって動かされるという「受動性」にそくして、“dominus”に隷属している。

しかるに、“dominus”も“servus”も、人間であるかぎり、ペルソナである。そして、ペルソナであるかぎり、理性的本性をもって自体的な仕方ではたらく者であり、自らのはたらきの主権を有している。ここで、われわれは大きな問題に直面する。それは、“servus”である人間の「主権」をどのように捉えなければならないかという問題である。

トマスが「人間は自らのはたらきの“dominus”である」と言う時、その場合の「人間」に何らかの区別を前提にしているということは、とうてい考えられない。いかなる人間も、性別や信仰の有無にかかわらず、人間であるかぎりペルソナであり、神の“imago”であり、自らのはたらきの“dominus”である。このことは、「すべての人間は自然本性において平等 (par) である」⁽⁵⁾という主張において、明白であろう。

したがって、次のように考えなければならないであろう。人間であるかぎりの“servus”は、自らの本来に関する主権を有している。その一方、“servus”であるかぎりの“servus”には、「“dominus”によってその命令にそくして動かされる」という「受動性」と「隷属性」が属している。そして、「隷属性」を強調するならば、トマスには奴隷主義者のレッテルが貼られうる。これに対して、「受動性」を強調するならば、トマスは、能動と受動という仕方で捉えられる人間関係の説明として、“dominus”と“servus”の関係をを用いているということになるであろう。

詳細は、“servus”に関するそれぞれの用例にそくして解釈されなければならない。しかし、少なくとも「自らのはたらきの“dominus”」に関する“dominus”と“servus”の関係は、能動と受動の関係にもとづいているのである⁽⁶⁾。

Ⅱ. 人間的行為と倫理的行為

では、人間的行為における能動と受動の関係とは、そもそも何を意味しているのであろうか。トマスは、『神学大全』第二—一部第一問題第三項で、「人間的行為は目的から種 (species)

を受けとるか」を問題にしており、その主文で次のように言っている。

おのおのものは、「可能態 (potentia)」ではなく、「現実態 (actus)」にそくして種を獲得する。(中略)そして、このことはまた、本来的な運動においても観られなければならない。じっさい、運動は何らかの仕方で能動と受動に区別されるから、そのいずれもが現実態から種を獲得する。すなわち、能動は、はたらきの「根源 (principium)」である現実態から、これに対して、受動は、運動の「終局 (terminus)」である現実態からである。(中略)そして、人間的行為は、能動という仕方で観られるにせよ、受動という仕方で観られるにせよ、いずれの仕方で目的から種を獲得する。じっさい、人間的行為は、どちらの仕方で観られうるものであり、それはすなわち、人間が「自分自身を動かす (movet seipsum)」、そして、人間が「自分自身によって動かされる (movetur a seipso)」ということにもとづいてである。しかるに、先に言われたように、行為は、考量された意志から発出するかぎりにおいて、人間的と言われる。さらに、意志の対象は善であり目的である。それゆえ、人間的であるかぎりにおける人間的行為の根源が目的であることは明らかである。同様に、目的はかかる行為の終局でもある。なぜなら、それへと人間的行為が終極づけられるものは、意志が目的として意図するところのものにほかならないからである。(中略)倫理的行為は本来的な仕方で目的から種を獲得する。じっさい、倫理的行為と人間的行為は同一なのである⁽⁷⁾。

何か「種を獲得する」ということは、それが「どのような種に属するか」という仕方で、そのものの性質が決定されることを意味する。そして、そのような種は、何かをすることが可能であるという可能態にそくして捉えることはできない。可能態では、その性格が確定されないからである。したがって、かかる性格はその現実態から受けとられることになる。そして、このような種の決定は、運動本来のあり方に適合している。

しかるに、運動そのものは、能動と受動という観点から区別される。それは、その運動が何を根源として現実化されるか、そして、いかなる終局をめざして現実化されるか、という区別である。そのため、運動は根源である現実態からも、終局である現実態からも種を受けとることになる。

人間的行為の場合、考量された意志から発出する行為であり、意志の対象は善であり目的であることから、目的は人間的行為の根源である。同時に、人間的行為は意志によって限定された何かを目的として発出することから、目的は人間的行為の終局でもある。したがって、人間的行為は、根源としての現実態である目的からも、終局としての現実態である目的からも種を受けとるわけである。

ところで、人間的行為が種を獲得するということは、人間的行為の種的な性格が決定されることを意味している。しかるに、この場合の種的な性格とは、倫理的性格にはほかならない。すなわち、その人間的行為の倫理性は、いかなる目的によって、どのような目的をめざして現実化されたかに応じて決定されるのである。そのため、外見上はまったく同じ行為であっても、その目的が何かによって、その行為の倫理的内容は異なることになる。

人間的行為は、構造的には、善である目的を対象とする意志から発出する行為である。しか

しながら、この場合の善は、あくまで個々の人間の意志が欲求の目的とするところの善であり、それが倫理的な意味での善であるとはかぎらない。目的という現実態にそくして行為の種的性格が決まるという点で、「倫理的行為と人間的行為は同一なのである」。

結び 人間的行為における能動と受動

さて、先の引用から、人間的行為における能動と受動が何を意味するかが示されることになる。人間的行為は、能動と受動の「どちらの仕方でも観られうる」のであり、能動の場合は「人間が自分自身を動かす」ということを、受動の場合は、「人間が自分自身によって動かされる」ということを、それぞれ意味している。そして、このような能動と受動の区別にもとづいて、人間的行為そのものの可能性が成立している。

もし、人間的行為がたんなる能動性に由来するのであれば、その場合の主権は、まさに「隷属と主権の関係」にもとづくものとして捉えられる。その結果、自らのはたらきの“dominus”とは侵すことのできない人間の自律性や主体性を意味することになり、その主権は、受動的要素を排除する以上、容易に肥大化され、絶対化される可能性にさらされる。そのような状況では、自己はどこまでも“dominus”となり、自己を他者や共同体において正しく秩序づけることが非常に困難になるであろう。

これに対して、「人間が自分自身によって動かされる」という受動性にもとづいて、「人間が自分自身を動かす」という能動性が成立しているという点から出発するかぎり、人間的行為における「能動と受動の関係」は、「動かす自己」と「動かされる自己」との有機的な緊張関係として解されうる⁽⁸⁾。

このような「動かす自己と動かされる自己の関係」にもとづくならば、人間的行為が、現実にはきわめて複雑であること、自分自身がその“dominus”でありながらも往々にして自分でも制御が難しい場合が少なくないこと、そして、人間そのものがその内部にある種の緊張をはらんでいることを、理解することができるのではないだろうか。

さらに、受動性がより大きな能動性を可能にするという仕方で、人間的行為そのものの可能性を捉えることができる。もちろん、この場合の「可能性」とは、倫理的な意味での善にも悪にも向かう可能性である。

しかるに、このような「能動と受動の構造」において、至福である究極目的への運動は現実化されることができる。その意味で、この構造は善にも悪にも開かれているが、ペルソナであるかぎり、そして神を範型とする“imago”であるかぎり、人間的行為には究極的な善へと向かう方向性が具体的な傾きとして見出される。神へと向かう運動は、人間的行為における能動と受動の関係にもとづいて、展開されるのである。

略号

S.T. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae* (『神学大全』), ed. Paulinae, Torino, 1988.

- 佐々木2005 『トマス・アクィナスの人間論－個としての人間の超越性－』, 知泉書館。
佐々木2008 『共同体と共同善－トマス・アクィナスの共同体論研究－』, 知泉書館。
佐々木2011 佐々木亘「人間における連帯性－トマス・アクィナスにおける自然本性の理解をめぐって－」, 『経済社会学会年報』第33号, 74－83頁。

註

- (1) 筆者は、永合位行神戸大学教授を研究代表者とする共同研究の研究分担者として、科学研究費補助金(基盤研究(C) 21530181:平成21年度～24年度)の交付を受け、「多元的秩序構想における経済学統合化の試み－中間組織の経済倫理学に向けて－」という研究課題にも取り組んでいる。この共同研究では、経済学の分野において、中間組織の可能性を探っている。この点は、佐々木2011, 78－80頁参照。しかるに、トマスの思想は黎明期の日本経済学に多大な影響を与えている。この歴史的事実が現在の日本にいかなる意味を持ちうるかという点は、筆者が近年中に取り組むべき重要な課題であると考えている。それは、思想史における共同体の再構築にはほかならない。そして、この課題の実現のためには、トマスの共同体論にキリスト教の枠組みを超えた普遍性を示していかなければならない。今回の博士論文では、「連帯性」という展望のもとに、かかる普遍的解釈を試みている。
- (2) *S.T. I, q.82, a.1, ad 3. sumus domini nostrorum actuum secundum quod possumus hoc vel illud eligere. Electio autem non est de fine, sed de his quae sunt ad finem, ut dicitur in III Ethic. Unde appetitus ultimi finis non est de his quorum domini sumus.*
- (3) 佐々木2005, 67－68頁参照。
- (4) *S.T. III, q.20, a.1, ad 2. relatio servitutis et dominii fundatur super actione et passione: in quantum scilicet servi est moveri a domino secundum imperium. Agere autem non attribuitur naturae sicut agenti, sed personae.*
- (5) *S.T. II-II, q.104, a.5, c. omnes homines natura sunt pares.*
- (6) 佐々木2005, 77－85頁; 佐々木2008, 127－138頁参照。
- (7) *S.T. I-II, q.1, a.3, c. unumquodque sortitur speciem secundum actum, et non secundum potentiam:..... Et hoc etiam considerandum est in motibus propriis. Cum enim motus quodammodo distinguatur per actionem et passionem, utrumque horum ab actu speciem sortitur: actio quidem ab actu qui est principium agendi; passio vero ab actu qui est terminus motus:..... Et utroque modo actus humani, sive considerentur per modum actionum, sive per modum passionum, a fine speciem sortiuntur. Utroque enim modo possunt considerari actus humani: eo quod homo movet seipsum, et movetur a seipso. Dictum est autem supra(q.1.a.1) quod actus dicuntur humani, in quantum procedunt a voluntate deliberata. Obiectum autem voluntatis est bonum et finis. Et ideo manifestum est quod principium humanorum actuum, in quantum sunt humani, est finis. Et similiter est terminus eorundem: nam id ad quod terminatur actus humanus, est id quod voluntas intendit tanquam finem:..... actus morales proprie speciem sortiuntur ex*

fine: nam idem sunt actus morales et actus humani.

(8) 佐々木2005, 126-134頁参照。

本稿は、平成23年度科学研究費補助金（基盤研究C）による、研究成果の一部である。

